

硯水と書る仔細は未聞もし硯の乾きたるに水をうつすがごとく、疲たるものに酒菓を與へて是を慰め用をなす義にや、されど是は推量の設なり、橘洲は間食ケンズイかといへり、

〔梅園日記二〕硯水

東牖子云、農民舖前に食するをケンズイと云、間炊なるべし、建水と古く書來れど、據をしらず、
略○中 靈異記延喜式の間食は、後世の硯水とは異なるべし、又按ずるに、運歩色葉集云、硯水、咸陽宮

作時、依高硯水凍、入酒則硯水不凍、餘酒大工飲之、今世傳來曰硯水也、とあるによれば、硯水はもと酒をいへるを、うつりて他の食物をも工匠にあたふるをば、硯水とよべるならん、

〔永徳二年春日燒失記〕一至徳元年十二月九日、若宮神主殿祐ノ御宿所ニテ幕串ヲツクル、百卅本也、此時ケンズイ六升、御供二前、御奉行ヨリ大工ニ給ル、

一至徳二年二月十三日、御事始アリ、其次第、先規ノゴトシ、番匠方ヨリ三方ノ常住ニケンズイアリ、フキノ方ヨリモ同ジクアリ、

一同八月廿五日、米ヌリニ、三方常住ニケン水代、南北エ六百文、若宮エ二百文出候、

〔浪花街酒噂三〕それよりもまだ江戸にないことがありやす、春から夏にかけて日の長い時分に

なりやすと、晝飯から夜食の間に、又飯を一度喰ひやす、是を八ッ茶とも小晝ともいひやす、京都にてはケンズイといひやす、万松始めて承りやした、小晝も八ッ茶もわかりやすが、ケンズイといふは、どふいふ訣でありや、正鶴人、鐘成さんの説に、ケンズイは文字で書ニは、間炊と書がよからうといはれやしたが、至極面白ふおぼえやす、千長なるほど晝飯と夜食の間にくふのでありやすから、間に炊の字は面白ムりやす、

〔運歩色葉集天〕點心

〔易林本節用集天食服〕點心テンシン

點心